



JWU 子育てサイエンス・ラボが発行するニュースレター「ゆりのき」は子育てにまつわる様々なトピックやお気軽に参加できる「子育てサイエンス・カフェ」のご案内を掲載しています。以前の「ゆりのき」も[公式HP](#)で閲覧できます

=====**第14回子育てサイエンス・カフェ報告(7月29日実施)**=====

### 「弱虫は本当にダメか? : アタッチメントの理論から考える」

「子どもの生きる力」が最近の教育目標となる背景に、子どものひ弱さ(脆弱性)の問題があるように思います。「わんぱくでもいい たくましく育てほしい」というキャッチコピーが流行ったのが1979年です。最近学生から研究テーマの話やとやら自己評価(自尊心)という言葉や耳にします。今回は、この半世紀というもの、ずっと社会や子どもの関心事だった自信のなさを「弱虫」の特徴の一つととらえ、かれらの生きる戦略をアタッチメントの理論から考えてみます。



弱虫と言えば、たいていの人は、怖がり、意気地なし、臆病、チャレンジしない、困難に立ち向かおうとしない等のイメージを頭に思い浮かべます。こうした子どもは、友だちからからかわれたり、いじめられたりするのではないかと心配して、親はそれを正そうとします。弱虫は本当にダメなのでしょうか。

この怖がりの謎を解くには「恐怖」という感情について知る必要があります。子どもの恐怖を発達から突き詰めたのがジョン・ボウルビー(1907~1990)というイギリスの精神科医です。かれは恐怖という感情はもともと人間に組み込まれている、生存に不可欠な本能的なものであるという進化論的な考え方から有名なアタッチメント理論を構築しました。

恐怖を感じるから人は助けを求め、助けを求められるから人はそれに応じる。その繰り返しが子どもと親とのきずな(bond)を作るとボウルビーは考えました。子どもに怖そうなものを見せたり、その近くに安心を与える母親に同席してもらったりして、子どもの反応をいろいろと調べた当時の多数の実験結果を理論構築のエビデンスとしました。



その後、子どもの恐怖反応から、誰かが自分の恐怖を和らげてくれるだろうと人を信頼するタイプの子(安定型)、ただひたすらに助けを求める典型的な弱虫タイプの子(不安型)、まるで親など関心がないといった弱虫をカモフラージュするタイプの子(回避型)がいることに気づきました。これらの子どもはどれも自分がほんとうのところでは弱虫であることを知っており、それを知っているからこそ、その子どもたちは大人たちに守られ、その結果、その子どもたちのDNAは子孫に引き継がれていくのだと考えたのです。つまり、アタッチメントというのは弱虫が生き残るという戦術の理論とも言えます。勇気を鼓舞して戦争や争いを繰り返す、いわば怖いもの知らずのDNAは絶えてしまうということです。

とはいえ、人は限界を超える恐怖を体験すると、いわゆる恐怖症(phobia)といった精神症状が現れますから要注意です。こうなると強すぎる恐怖はなかなか厄介です。しかしそれでも、弱虫がこうした厄介病にかかると、腰の重たかった周囲の家族はそれを何とかしようとして走り回るようになります。つまり、弱虫は周囲を動かす力があるのです。これが弱虫の最強の戦略で、弱虫は強虫と言えるのです。

(家政学部児童学科 岡本 吉生)

## ====子育て関連 卒論紹介====

～貧困世帯に育つ子どもの学習支援に関する卒業論文を家政経済学科のゼミから紹介します～

(家政経済学科 教授 天野 晴子)

家政経済学科では、生活をめぐるさまざまな問題や課題を、経済学を中心に複数の社会科学の方法を使って探究するため、卒業論文のテーマも多岐にわたっています。昨今社会問題化している子どもの貧困をとりあげる学生も毎年複数みられるようになりました。今回ご紹介する卒論は、「日本における学習支援の取り組み」をテーマに、貧困世帯に育つ子どもの学習支援をおこなっている NPO 法人の活動を事例にとりあげた 2021 年度ゼミ生の成果です。

論文作成の背景や研究目的を要約すると、次のようになります。貧困世帯の子どもへの学習支援が自立支援につながることは、多くの先行研究が明らかにしています。しかし、実際にどのような支援が求められているのか、効果的であるのかについての知見の蓄積は、まだ十分とはいえません。そこで、貧困世帯に育つ子どもへの学習支援の実態について、著者である当該学生が大学 3 年次より所属し活動している特定非営利活動法人 A を事例として調査を行っています。学習支援のボランティア活動を通じた参与観察により、子どもの学習支援の現状や課題、展望にせまろうとした点で、独自性のある意欲的な論文となっています。


論文では、日本における子どもの貧困をめぐる問題の背景、貧困の定義を踏まえ、日本における子どもの貧困の状況を明らかにした上で、教育格差とその解消に向けた取り組みを示しています。経済格差がもたらす教育格差の状況と、子どもの貧困対策の推進に関する法律、貧困の世代間連鎖を断ち切るための政策をとり上げ、日本における学習支援事業を分析しています。ここでは、学習支援だけでなく、居場所の提供や親に対する養育支援等複合的な支援が求められ取り組みが始まっていること、自治体による学習支援の運営方法（「直営」「委託」「併用」）では、直営方式との併用を含めて約 8 割の自治体が「委託」を行っており、委託先は NPO 法人や社会福祉協議会等が多いこと、自治体だけでなく、民間の運営による学習支援も必要とされていることに言及しています。

本論文で特に注目されるのは、貧困の連鎖を防ぐための活動を行っている NPO 法人 A を対象に行った参与観察を含めた調査です。著者である学生が学習支援のボランティア活動を行ってきた団体でもあり、学習支援だけでなく DV 相談やシェルターの運営、母子家庭とその子どもたちへの様々な事業を行っており、DV と貧困の複合的な発生をかかえた事例への対応に学習支援が組み込まれている点で、前述の複合的な支援の事例として多くの示唆が得られる結果となりました。学習支援の内容や、利用者の子どもの様子を観察・分析し、子どもたちは自分の気持ちを家族に打ち明けることができない状況にあること、シェルターや居場所の提供等によって DV や虐待からは逃れることができても、それによる影響やトラウマなどは今も子どもたちを蝕んでおり、子どもたちの置かれている立場は厳しいものであることを明らかにしています。最後に示された「子どもたちに対する支援が不足している」という課題に対し、「支援員を増員する」ことによって少しは改善できると考えられ、自治体からの助成金だけではなく、民間から助成金を多く得ることができれば、支援員を増やして子どもの心を癒やしていくことができると述べています。

今回の卒論のように、ボランティアやサークル活動を通し、身近な生活や地域の社会的課題解決につながるような経験を在学中に行っている学生は、かなりいるようです。著者である学生が述べていた「子どもたちの多くは、トラウマを抱えており、気分がムラがある為、無理に勉強をさせようとするのではなく、できるだけ子どもたちの要望に添うようにサポートするようにしている」など、実際にかかわってきた学生ならではの内容が盛り込まれています。その上で、これらの経験を相対化し、客観的に整理し検討考察するプロセスに、本学で全員必修としている卒論作成の醍醐味と意義を強く感じたケースでもありました。



=====**次回の子育てサイエンス・カフェは!**=====

 **オンライン開催**

## 第15回 子育てサイエンス・カフェ

### クライシス(災害・パンデミック)から 子どもの**日常生活**をとりもどす

講師：家政学部住居学科 教授 定行 まり子

概要：各地を襲う大地震、気候変動の影響と思われる自然災害が頻発しています。2020年からは新型コロナウイルス感染症に生活が脅かされ、また、世界では理不尽な戦争に心を痛める日々を過ごしています。このようなクライシスともいえる状況下、特に、3年にもわたるコロナ禍では、マスクの着用、消毒の徹底、遊びの制限、行事の制限など、子どもを取り巻く生活環境も一変しました。子どもたちの心身に少なからず影響を与えていると危惧します。今回は、東日本大震災・原発災害、また、コロナ禍から子どもの日常をとりもどす取り組みを通して見えてきた子育ての未来について考えてみます。



日時：2023年9月30日(土) 10:30~12:00

申込：お申込受付後、返信メールにてZoom詳細をお送りします。

<https://forms.office.com/r/QdgyNqjFZz> または QRコードからお申込みください。

●参加費：無料 ●主催：日本女子大学社会連携教育センター

▼申込み



=====**イベントのお知らせ**=====

日本女子大学人間社会学部心理学科・日本女子大学社会連携教育センター心理相談室 共催

### 子育て支援者を中心とした多職種協働のダイナミズム —「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」の経験から—

日時：2023年10月29日(日) 13:30~15:30

講師：日本女子大学名誉教授 吉澤 一弥

概要：このプロジェクトのデザインは、立ち上げ時に筆者がたまたま出会った活動理論学のフレームワークを参考にしました。ボトムアップ的な集合知から生まれた「親を加害者にしない支援のヒント集」、「現代的な共同養育モデル」、「子どもの成長の喜びを支援者が親に伝達する意義」などの概念形成のプロセスを振り返り、今後の課題につなげたいと考えます。

お申込み・詳細はこちらから▼ (定員 100名)

[https://llc.jwu.ac.jp/exl/psyc/news/2023/231029\\_sinrisoudan\\_kensyu.pdf](https://llc.jwu.ac.jp/exl/psyc/news/2023/231029_sinrisoudan_kensyu.pdf)

【日本女子大学 心理相談室】 [https://llc.jwu.ac.jp/exl/psyc/nlc\\_psyc.htm](https://llc.jwu.ac.jp/exl/psyc/nlc_psyc.htm)



第5回 JWU 幼児教育・保育セミナー

「配慮の必要な子ども」とは インクルージョンの観点から考える保育

日時：2023年10月28日(土) 15:00~17:00

場所：日本女子大学 目白キャンパス 百二十年館 12001 教室

講師：白梅学園大学 准教授 廣澤 満之

概要：幼児教育・保育の現場において保育者にとって、大きな課題の一つになっている事柄は、発達障害のある子どもや、いわゆる「配慮の必要な子ども」たちへの保育があげられています。こうした子どもたちに対して、従来の集団保育の方法は必ずしも有効ではありませんでした。幼児教育においてもインクルージョン（障害の有無といった視点ではなく、多様な子どもたちの特性を踏まえた保育）の観点が求められています。子どもたちの多様性を理解し、すべての子どもたちが主体的に活動できる保育や、多様な子どもたちへの養育に困難を持つ親への支援を行うことが現場保育者には必要とされています。

今回の JWU 幼児教育・保育セミナーでは、発達障害等の適切な理解と保育方法、親支援の方法について、インクルージョンの観点による保育実践に詳しい廣澤満之氏からお話を伺い、保育現場にヒントをいただく機会としたいと考えています。

【参加申込み方法】メールの件名を「10月28日講演会申し込み」とし、本文に①氏名②所属（園、施設名、学校名等）③参加人数④メールアドレスを記載の上、**10月23日(月)**までに下記メールアドレスへお申込みください。

【申込みメール宛先】

（一社）日本女子大学教育文化振興桜楓会 公共事業部門 学術支援担当 [gakujutsu@atlas.jwu.ac.jp](mailto:gakujutsu@atlas.jwu.ac.jp)

=====**会員募集中!**=====



お子様と大学の研究に  
参加しませんか？



JWU 子育てサイエンス・ラボでは、子育てや子どもの発達に関する研究調査等を行っています。

ラボ協力会員に登録して、お子様と一緒に、本学の研究に参加しませんか？

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、学外の会員様との研究、調査が開始できずにおりましたが、感染症対策を講じながら、子どものことばや見る力の発達などの調査を本格開始いたしました。おかげさまで、調査に参加くださる会員様のご来校が続いています！

「ラボ協力会員」詳細、また新たにご登録を検討いただける方は QR コードからご確認ください。

(調査の内容・所要時間・謝金の有無等は都度担当者をご説明し、1 回ごとに協力いただけるかどうかをお尋ねいたします。)



「JWU 子育てサイエンス・ラボ」を運営する社会連携教育センターの公式 SNS アカウントです。

